様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２１４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７２１

研究課題名（和文）小学校外国語活動における効果的なティーム・ティーチングのための現職教員研修の開発

研究課題名（英文）Development of Elementary School Teahcers' Training That Is Effective for Team-Teaching

研究代表者
町田　智久（Machida, Tomohisa）

国際教養大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：４０６４８７７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：秋田県教育委員会と協働して，外国語不安の軽減を目指した小学校の教員研修を開発・実施した。既存の教員研修の形態を残しつつも，小学校教員の外国語活動指導の実態調査や研究成果を生かしながら，小学校教員の外国語不安の軽減を目指した研修開発を行った。５日間の夏季集中研修の中に、ALTとのティーム・ティーチングに必要な要素をスパイラル的に実施することで、研修後には参加者の外国語不安の数値が大きく軽減された。さらに，事後アンケートでは英語でのコミュニケーションに対する積極的な意見が多く見られ，研修が教員の外国語不安の軽減に効果的であったことが示された。

研究成果の概要（英文）：Through working with Akita Prefecture Board of Education, the researcher developed an elementary school English teacher training by focusing on alleviating their foreign language anxiety. Making teachers have confidence in English would increase the amount of English input in class. In the training, Japanese teachers were required to explain their own teaching plan to ALTs and to team-teach a demo lesson in a simulated classroom setting with ALTs. Also, Japanese teachers learned useful English expressions and tried using them with gestures for communicating with ALTs. Through successful collaboration with ALTs, Japanese teachers realized that they did not need to speak “perfect” English for communication, which reduced their levels of anxiety. Japanese elementary teachers developed their confidence about using English through the training, which enhanced communication between Japanese elementary school teachers and ALTs.

研究分野：外国語教育

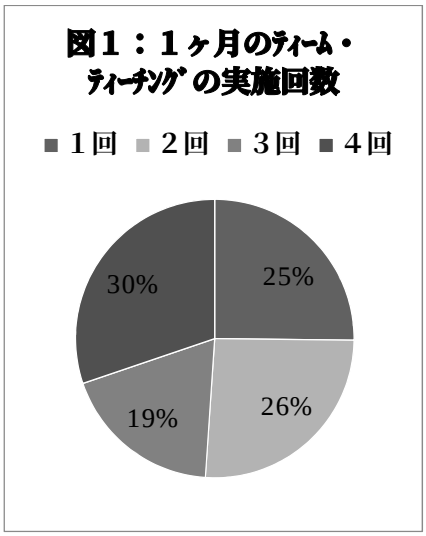
キーワード：小学校　英語教育　教員養成　外国語不安

１．研究開始当初の背景

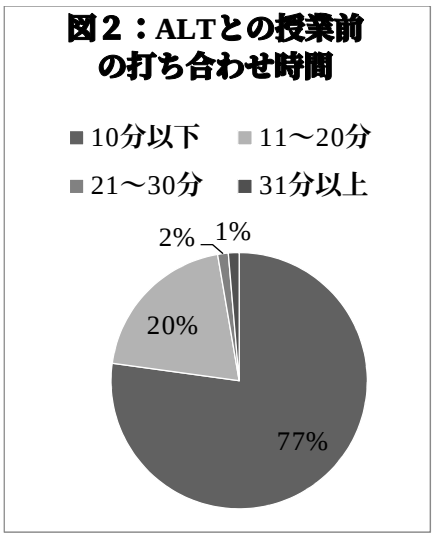
文部科学省が新学習指導要領を平成20年に発表し、小学校における外国語活動の本格実施へと舵を切った。平成21年度からの２年間は移行期間ということで、各小学校では外国語活動の実施に向けた取り組みを開始した。実際には、初年度だけでも98.7%（『平成２１年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査（Ａ票）の結果について』）の小学校が、授業時数に違いはあるものの外国語活動を実施した。しかし、本申請分担者が移行期間中におこなった秋田県内の小学校教員（195人）に対する聞き取り調査では、実に91.1%が外国語活動の授業に対して「自信がない」と回答した。また、学校現場の教員からは、効果的な指導に向けた研修の実施を要望する声も多く寄せられた。この状況を受け、本申請代表者は小学校で外国語活動に取り組む教員を対象とした研修プログラム開発の必要性を強く感じ、教員研修に対するニーズを調査することとした。そして、外国語活動の本格実施後１年を経た平成24年に、秋田県内で外国語活動を指導する小学校教員（160人）を対象として、秋田県教育委員会及び秋田市教育委員会の協力のもとに指導の実態調査を実施した。

実態調査は、①外国語活動の授業内容、②ティーム・ティーチングの方法、③教材・教具、④教員研修、⑤学校内での取り組みの体制、の５項目についておこなった。調査結果の中で特徴的だったことは、大きく分けて２つあった。１つ目は、外国語活動ではティーム・ティーチングが指導方法として主流であり、その実践に対して困難を抱える教員が多いこと。２つ目は、研修機会に恵まれていないこともあり、外国語活動全体を通した研修のニーズが高いことであった。

授業形態に関しては、「担任教師１人での授業」と「ALTとのティーム・ティーチング」の２種類でおこなわれており、ALTの中でも約７割がJETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）のネイティブ・スピーカーであることが分かった。文部科学省は「「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」（平成15年）の中で、“実施回数の３分の１程度”の授業をネイティブ・スピーカー等の高度な英語力を有する人材とともに指導することを奨励していた。しかし、実際は75%の小学校で授業実施回数の２分の１以上の割合でALTとのティーム・ティーチングが実施されており、ティーム・ティーチングが外国語活動の授業では主流となっていることが分かった（図１参照）。



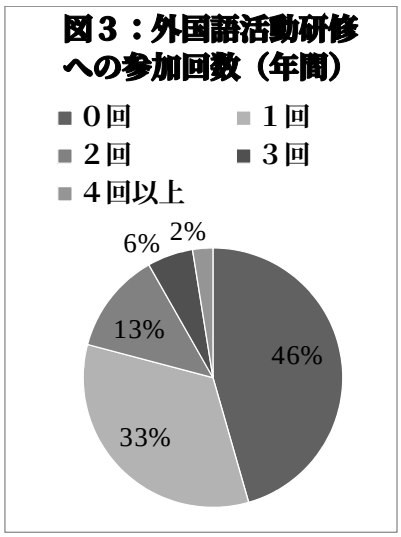
しかし、その実施にあたっては、担任教師の英語力不足など多くの困難があることも判明した。調査した教師の約８割がALTとの授業前の打ち合わせを10分以下で終えており（図２参照）、その最も大きな理由は、担任教師が英語によるコミュニケーション能力を十分に有していないことであった。担任教師による日本語やジェスチャーのみを使っての一方的な指示で、ALTに指導案の説明などが行われている実態が浮かび上がってきた。



実際に、英語によるALTとの授業前の打ち合わせを行っている小学校教員は９%にしか満たず、担任教師の英語力不足によるALTとのコミュニケーションの不一致から、ティーム・ティーチングの良さを十分に生かした授業が行われていない可能性も認識できた。日本語能力の十分なALTを採用することが難しい現状では、担任教師の英語力の向上は不可

欠なものであることが明らかとなった。

また、小学校教員は、外国語活動に関する研修への参加に非常に高い関心を示しており、そのニーズも多岐にわたっていた。特に要望の高い項目としては、①授業で使える英語表現の習得、②教材の開発・使用方法、③単独及びティーム・ティーチングでの授業の進め方、④他教師の授業見学、⑤自身の英語力の向上であった。しかし、実際は「多忙」や「他教科の準備」を理由に研修会に参加できていない現状も明らかとなった。調査に参加した教員の 46%が昨年度外国語活動に関する研修には１度も参加しておらず、33%の教員も「１回」だけ参加したと回答した(図３参照)。



つまり、約８割の外国語活動を担当する小学校教員は、研修にも十分参加できておらず、現場教員を対象とした研修の実施が急務であることが分かった。

２．研究の目的

そのため、本研究では平成 23 年度から本格実施となった小学校の外国語活動において、担任教師と外国語指導助手（ALT）とのティーム・ティーチングでの効果的な授業実践に向けた教員研修を開発する。外国語活動における教材開発、日本語が話せない ALT との授業打ち合わせ、さらに、授業の中での英語を使った ALT や児童とのコミュニケーションの取り方について研究する。また、秋田県教育委員会と協力し、毎年夏に実施している５日間の「小学校外国語活動教員研修事業」の研修日程の中に、研究で得られた成果を研修内容として取り入れ、実際に参加する現職の教員に実施しその効果を検証する。

３．研究の方法

平成 25 年度は①近隣諸国におけるティーム・ティーチングの事例分析、②秋田県内における小学校でのティーム・ティーチングの実態分析を中心に実施した。

「近隣諸国におけるティーム・ティーチングの事例分析」では、日本と同じく外国語としての英語教育（English as a foreign language）の状況で、早くから小学校英語教育を開始している韓国と台湾での実地調査をおこなった。韓国へは 9 月 29 日から 10 月 4 日までの 6 日間滞在し、2 つの公立小学校と１つの私立小学校、それにソウル市教員研修センターと英語村（自治体が運営する英語のテーマパーク）を訪問した。各小学校では授業見学とともに、指導教員や校長に対して英語の授業への取り組みへのインタビューをおこなった。教員研修センターでは、小学校教員の 2 週間の英語集中研修の一部を参観した。

台湾へは 11 月 24 日から 11 月 29 日までの 6 日間滞在し、台中市にある 5 つの公立小学校を訪問し、授業見学や担当教員へのインタビューをおこなった。台湾は早くから英語の選科教員制度を小学校で取り入れており、高い英語力を身につけた者が指導に当たっていた。さらに日本での指導主事にあたるような仕事を兼務している教員へのインタビューの機会も得て、小学校教員への英語研修の実態についても情報を得た。韓国と台湾での実地調査については帰国後に分析をし、本研究での教員研修開発に向けての基礎データとした。

「秋田県内における小学校でのティーム・ティーチングの実態分析」については、秋田県教育委員会の３つの教育事務所に協力を得ながら、県内の 150 校（66%）からアンケートを回収し分析をおこなった。また、同時におこなった小学校での授業及び打ち合わせの参観であるが、小学校の受け入れの都合等で当初の予定より少ない延べ８校で実施した。

平成 26 年度は①研修プログラムのパイロット版の作成、②秋田県内における小学校でのそのパイロット版の研修の実施・改善を中心に研究を進めた。

「研修プログラムのパイロット版の作成」では、90 分×3 回で終了する短期教員研修プログラムを作成した。5 日間で実施する教員研修内容を概ね含んだ内容の短期プログラムである。3 回のそれぞれのテーマを第 1 回「英語不安を和らげよう」、第 2 回「効果的な指導

手順を学ぼう」、第 3 回「ALT と組んでティーム・ティーチングをやってみよう」とした。まず 1 回目で、英語不安に対する理解と日本人教師と ALT の役割について学び、外国語活動の指導に対する心理的なバリアーを下げる。第 2 回目では、具体的な指導の手順や外国語指導で押さえるべきポイントについて理解を深める。そのうえで、第 3 回目で外国人指導助手との指導案作成や授業実施に向けた取り組みを行う。この 3 つの過程を経て、小学校教員の外国語不安軽減を進めていくこととした。

「パイロット版の研修の実施・改善」については、秋田県内の 2 つの小学校で校内研修会という形で実施した。参加校の募集は、秋田県教育委員会の協力を得て、プログラムの周知及び参加の呼びかけを行った。それぞれの小学校に、大学の教員と ALT 役の外国人留学生がそれぞれ赴き、研修を実施した。それぞれの小学校では、ほぼ全ての教員が参加し研修を実施した。校内研修会の開催時期は小学校により様々で、ほぼ 1 ヶ月以内で終了した小学校と、半年にわたり 3 回の研修を実施した学校とに別れた。研修の雰囲気も大規模な研修会場で行うものとは異なったが、参加教員にインタビューやアンケートを実施し、プログラムの改善点を探った。

４．研究成果

研修の構成に関しては，４つの柱（①不安に対するサポート，②実践的な指導技術，③英語によるコミュニケーションの成功体験，④ティーム・ティーチングの模擬授業）を中心に，教師の外国語不安の軽減を目指すものとした。

「不安に対するサポート」は，外国語不安そのものに対する理解を深め，英語を使用することに対しての苦手意識を和らげることを目指したものである。Hamamoto（2012）や猪井（2009）の調査結果からも教師の英語使用への不安は非常に大きい。しかし，調査結果からは漠然とした英語への苦手意識や不安を口にする小学校教師が多く，その原因や対処方法についての理解は教員の間では浸透していないといえた。Horwitz（1996）が提唱するように，外国語不安についての認識を深めることが不安軽減には欠かせない。そこで，外国語不安の概要説明，TFLAS を使った各自の不安尺度の測定，参加者同士での外国語不安体験の共有，さらに不安を軽減するための取り組みの実例紹介などを複数のワークショップに分散させ，５日間の研修の中に組み込んだ。

「実践的な指導技術」は，精神面からのみでなく技術面からも教員の外国語不安を軽減することを目指したものである。小学校教員を対象とした英語教員研修についての調査では，指導手順や教室で使う英語表現，さらにティーム・ティーチングでの授業の進め方について学びたいというニーズが高かった（町田, 2013）。これらについてのワークショップを研修の中に組み込むことで，教師の指導技術の向上を図ることができる。また，バトラー（2005）や山森（2013）も，教員研修の中で教員の基礎的な英語能力を養成することの重要性を唱えている。教員自身の目標言語能力を高める工夫をすることで，教員の外国語不安の軽減につながると考えた。

「英語によるコミュニケーションの成功体験」は，教師が自ら英語でコミュニケーション活動を行う中から,「伝わった」「分かった」という成功体験をすることで，英語を使うことへの積極的な態度を養うものである。研究者（e.g., Tschurtschenthaler, 2013）からは，外国語でのコミュニケーションの成功体験は，学習者の外国語使用に対する自信を増大させるという例が報告されている。今回は，国際教養大学に留学している外国人留学生に，英語でのコミュニケーション・パートナーとして参加してもらった。研修に参加する小学校教員が，彼らと英語でのコミュニケーションをする中で成功体験を得られるような工夫を研修の中に組み込むことで，不安の軽減につなげられると考えた。

「ティーム・ティーチングの模擬授業」は，前述したように秋田県教育委員会が実施していた５ヶ年計画の教員研修でも行われていた。しかし，以前の研修は，元々ティーム・ティーチングでの授業に特化していた訳ではなく，単独授業又はティーム・ティーチングでの授業の中から一方を選択し，実施する形態であった。さらに，一応参加者全員が模擬授業に関わるものの, 代表で 10 人のみが交互に模擬授業を実施し，他の参加者は児童役として，それぞれの模擬授業に参加するという形であった。今回の研修では，外国語不安を軽減することを目的にした研修であるため，特に外

国人 ALT と組んでのティーム・ティーチングを想定し，参加者全員に教師役をやってもらうように工夫した。そのため，ALT 役を国際教養大学の留学生に，児童役を地元の小学生にお願いした。ALT 役の学生には，酒井（2014）が提唱するような，「言語や文化の情報提供者」，「インプットの提供者」，「コミュニケーションの相手」（pp. 92-93）といった役割を意識してもらいながら参加してもらった。

本教員研修参加者には，研修の前と後にそれぞれ外国語活動に対する気持ちや心構えも自由記述の形でアンケートした。事前アンケートでは，「自分の英語が間違っているのではないかと不安になる」（教員 A）や「自分の発音では，児童のよい見本にはならないなと不安になる」（教員 B），さらには「ALT の先生との授業は毎回気が重くなる」（教員 C）など教員自身の英語力や ALT との英語によるコミュニケーションに対して不安を感じている教員は 29 名（74.4%）であった。一方，研修終了後の事後アンケートでは，「自分の今の英語力でも，何とかやっていけるかもという気持ちになった」（教員 D）や「英語を使ってコミュニケーションすることが，楽しいと感じるようになった」（教員 E），さらには「もっと積極的に ALT と関わっていきたい」（教員 C）など，自分自身の英語力に自信を持ち始め，英語でのコミュニケーションにも積極的に取り組もうという姿勢が見え始めていた。実際に，「英語に対する不安は受講前より下がりました」（教員 F）の意見に代表されるように，不安が軽くなったという意見を８割以上の教員が自由記述の中で述べていた。事前アンケートで 29 名（74.4%）いた不安な気持ちを述べている教員も，事後アンケートでは２名（5.1%）であった。しかし，その２人も「不安は消えないが，あまり心配せずに ALT の方とどんどん関わっていけば，何とかなるものだと感じた」（教員 G）や「不安感（不安というより自分の実力に対する残念感というか無力感というか）がまだあるのは事実ですが，楽しい外国語活動にしていくためにも，ALT の先生にお願いしたり意思疎通をスムーズにしたりする程度の英語力は最低限必要だと思った。三日坊主にならないように頑張っていきたい」（教員 H）など，不安を持ちつつも非常に前向きな気持ちを表していた。

今後，2020 年の小学校英語の教科化を見据えて，更なる教員研修が必要になってくる。樋口・加賀田・泉・衣笠（2013）を始め多くの研究者が，多様な教員研修の必要性を唱えている。その際，小学校教員の外国語不安を取り除く視点も研修の中に含めるべきである。前述したように，様々な調査（e.g., ベネッセ教育総合研究所, 2011）や研究者（e.g., バトラー, 2005）によって，小学校教員が外国語活動指導への不安を持っている状況が示されている。外国語活動が 2011 年に必修化されたが，不安から高学年の担任を敬遠し，未だに外国語活動の指導経験が無い教員もいる。過渡期の今だからこそ外国語不安軽減の視点は必要なのである。もともと日本の小学校教員は，教師としての高い資質を備えている（Lee, Graham, & Stevenson, 1998）。その資質の高さを生かし，効果的な指導を行うためには，まず彼らの抱える不安を取り除く必要がある。その上で，英語運用能力や指導法を学ぶことにより，指導力の向上へとつながるのではなかろうか。

＜引用文献＞

ベネッセ教育総合研究所. (2011). 『第２回小学校英語に関する基礎調査：教員調査』Retrieved from http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179

バトラー後藤裕子. (2005). 『日本の小学校英語を考える：アジアの視点からの検証と提言』三省堂.

Hamamoto, S. (2012). 小学校英語科の導入における教員の見解 [Elementary teachers' views on English teaching]. In A. Stewart & N. Sonda (Eds.), *JALT2011 Conference Proceedings* (pp. 201-219). Tokyo, Japan: JALT.

樋口忠彦・加賀田哲也・泉惠美子・衣笠知子. (2013). 『小学校英語教育法入門』研究社.

Horwitz, E. K. (1996). Even teachers get the blues: Recognizing and alleviating language teachers' feelings of foreign language anxiety. *Foreign Language Annals, 29,* 365-372. doi: 10.1111/j.1944-9720.1996.tb01248.x

猪井新一. (2009). 「英語活動に関する小学校教員の意識調査」『茨城大学教育実践研究』第28号, 49-63.

Lee, S. Y., Graham, T., & Stevenson, H. W.

(1998). Teachers and teaching: Elementary schools in Japan and the United States. In T. Rohlen, & G. LeTendre (Eds.), *Teaching and learning in Japan* (pp. 157-189). Cambridge, UK: Cambridge University press.

町田智久. (2013). **効果的な外国語活動実施に向けた指導上の課題：秋田県での調査から見えてきたこと**. Paper presented at the 13th JES Conference, Okinawa, Japan.

酒井英樹. (2014). **『小学校の外国語活動　基本の「き」』大修館書店**.

Tschurtschenthaler, H. (2013). *Drama-based foreign language learning; Encounters between self and other.* Münster, Germany: Waxmann.

山森直人. (2013). **外国語活動に求められる教師の教室英語力の枠組みと教員研修プログラムの開発：理論と現状を踏まえて**. *JES Journal, 13,* 195-226.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9　件）

①Machida, T. (2016). "Japanese elementary school teachers and English language anxiety." *TESOL Journal, 7*, 221-237.

②**町田智久**、**内田浩樹**. (2015). **教師の外国語不安の軽減を目指した教員研修の開発**. *JES Journal*, 34-49. **査読有。**

③Machida, T. , & Walsh, D.J. (2015). "Implementing EFL policy reform in elementary schools in Japan: A case study." *Current Issues in Language Planning, 16*, 40-66.

④**町田智久**. (2015). **ティーチャー・トークを活用しよう**. *『英語教育９月号』, 64* (6), 46-47.

⑤**町田智久**. (2015). **ティーム・ティーチングを生かそう**. *『英語教育８月号』, 64* (5), 46-47.

⑥**町田智久**. (2015). **外国語不安の少ない学習環境を作ろう**. *『英語教育７月号』, 64* (4), 46-47.

⑦**町田智久**. (2015). **英語のリズムを理解しよう**. *『英語教育６月号』, 64* (3), 46-47.

⑧**町田智久**. (2015). **英語で言ってみよう**. *『英語教育５月号』, 64* (2), 46-47.

⑨**町田智久**. (2015). **英語に対する不安を取り除こう**. *『英語教育４月号』, 64* (1), 46-47.

〔学会発表〕（計　2　件）

①Machida, T. (2015). "Elementary teacher training: Focusing on alleviating non-native English speaking teachers' foreign language anxiety." Paper presented at 9th International Conference on Language Teacher Education, May 15, 2015, Minneapolis, Minnesota.

②**町田智久**、**内田浩樹**. (2014). **教師の外国語不安の軽減を目指した教員研修の開発**. **小学校英語教育学会**. July 26, 2014, **関東学院大学**, **神奈川県**.

〔図書〕（計　1　件）

①Machida, T. (2016). "Foreign language anxiety and Japanese elementary-school teachers' characteristics. In J. Crandall & M. Christison (Eds.), *Teacher Education and Professional Development in TESOL* (pp. 176-190). New York, NY: Routledge.

６．研究組織
(1)研究代表者

町田　智久（MACHIDA, Tomohisa）
国際教養大学・専門職大学院・准教授
研究者番号：40648771

(2)研究分担者

内田　浩樹（UCHIDA, Hiroki）
国際教養大学・専門職大学院・教授
研究者番号：70310589